

令和三年度

一般選抜入学試験（前期） 小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は表紙を含めないで2ページあります。解答用紙は3枚です。下書き用紙は1枚あります。
- 3 試験中に、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 4 試験開始の合図があったら、まず、すべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入してください。
- 5 解答はすべて解答用紙のそれぞれの解答欄に記入してください。
- 6 試験時間は90分です。
- 7 解答用紙は記入の有無にかかわらず、持ち帰ってははいけません。
- 8 この問題冊子と下書き用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

「自分自身の場合、親や友だちとの連絡、動画鑑賞、ゲームアプリ等の娯楽が不可欠な役割です。(中略) SNSは友だちでも知人でも知人ではない人でも誰とでもネットを通してつながることができません。僕はちなみにスマホを使って四年目なんですけど、使い始めの頃はというと『絶対、LINEは業務連絡しかしないよ』なんて親や友だちに言っていました。それから四年たち、気づけば僕にとってLINEは友だちとつながる絶好のアプリと化しました。↓情けない！ (中略) つまり僕の心の中に誰かといつもつながっていたい、孤独な状態はいやだ！ ひとりはいやだというような感情・考えが不可欠なものにしてしまったから、SNSが使えるスマホがあたりまえのものになったのだと僕は思います」

私は、大学の講義でスマホ依存について話すことが多いのですが、ある男子学生は講義内容をうけて、レポートにこう書いていました。彼にとって、スマホは「あたりまえ」のものであり、LINEなどのソーシャルネットワークサービス(SNS)を使って、つねに親しい人や知人、知人ではない人につながるための重要なメディアなのです。

ゲームや動画鑑賞は、時間つぶしか暇つぶし、趣味の時間の延長線上でスマホとつきあっていると考えることができるでしょう。しかし、SNSを使って誰かとつながっていないと「孤独」であり、「孤独」はいやだ、という感情をもたざるをえなくなったというのは、まさにスマホが彼にもたらした固有の新たな「生の状態」だと思ふのです。

LINEは確かに「業務連絡」するには、便利なツールです。ある集まりのなかでの情報伝達、情報共有を効率よく達成できると私も思います。「業務連絡」のツールであったはずが、彼のなかで、いつしか、LINEは親しい人、知人、赤の他人とつながるためのツールへと変貌していったようです。もっと言えば、つながるためではなく、「つながっていること」自体を確かめるためだけの、「つながっていたい」という意思や感情を確かめるだけのツールへと変貌していったのでしょうか。

誰かとつながっていたいと思ふLINEを使うとき、私たちはどのような話を相手に行っているのでしょうか。別に大した話ではない、ただの雑談だし、いちいち覚えておくほどの内容ではない、という返事が聞こえてきそうです。そんな長い文章は書かないし、面白いスタンプがいっぱいあるし、スタンプをうまく使えば、相手にいちいち言葉を使わなくても、自分の気持ちは伝わるし。こんな返事も聞こえてきそうです。話の中身じゃないよ、LINEでやりとりすること自体が面白いし、意味あることなんだ。こんな返事も聞こえてきそうです。いろいろな返事の可能性を考えていると、私のなかで「井戸端会議」という言葉が浮かんできました。

「井戸端会議」とは何でしょうか。近所に住んでいる奥さんたちが、井戸端に集まって、皿を洗ったり、野菜を洗ったり、洗濯したりしながら、雑談し、談笑する。そこにいない人の悪口や噂で盛り上がったたり、そうかと思えば、普段の暮らしの厳しさやしんどさを愚痴る、その意味で重い雑談になったりする。いずれにしてもまさに親しい人や知人が集まり、

つながる場であり、語り合うという実践でした。

「でした」と私は過去形で語っていますが、まさに過去の情景と言えるでしょう。なぜなら私たちの日常生活で、もはや「井戸」はあたりまえのものではないのです。でも私が子ども頃であった昭和の時代までは生活の場に「井戸」は存在しました。炊事や洗濯など生活に必要な水を得るために、近所の人々は「井戸」を共有し、「井戸」を活用しました。当然のごとく、そこには人々が集まることになり、語り合いが生まれたのです。

ところで、相手と他愛もない話をしたり雑談しているという点でLINEでのやりとりと「井戸端会議」は、同じでしょうか。私は大きく二つの点でこれらは異なっていると思いません。

一つは、直接対面してやり取りしているか否かという点です。「井戸端」はまさに、近所の人たちが集まってくる場所で、人々は、お互いの様子や表情を確認しながら雑談します。このとき、相手の様子を見て、表情を見て、何を感じ、考えているのかを推し量りながら、楽しい話で盛り上がったりまするものです。まさに直接的で対面的なコミュニケーションの醍醐味や面白さが実感できるでしょう。

今一つは、そこで実際に暮らしている人々から決して切り離すことができない日常的な営みであるか否かという点です。先に述べたように「井戸」は暮らしに絶対欠かすことができない「水」を得ることが出来る重要な場所です。そして近所の人々は「水」を得るために「水」を使うために「井戸」に集まり、そこで「会議」が始まってしまふのです。すなわち「井戸端会議」とは、人々の暮らしから遊離した、どこか遠い空間で起こる営みではなく、常に、人々の暮らしに根ざし、人々の生活臭や生活実感が充滿した日常で起こる営みと言えます。もちろん近所の人と雑談したくて人々が「井戸端」に集まってくるからこそ「会議」が成り立っているのかもしれない。ただ、そこが暮らしに根ざした「井戸端」という象徴的な場所であり、直接的な対面のコミュニケーションが基本だという点でLINEでのやりとりとは異質だと思ふのです。

(好井裕明『「いま、ここ」から考える社会学』より)

問一 この文章を二〇〇字以内で要約しなさい。

問二 二重線部はどういうことですか、三〇〇字以内で説明しなさい。

問三 波線部の筆者の見解についてあなたはどう思いますか。自分の体験や具体例をもとに四〇〇字以内で述べなさい。